

日本の名作名文ハイライト

# 舞踏会

芥川龍之介

朗読 wis

出所 【朗読】声を便りに、声を頼りに——。

<http://18.art-studio.cc/~koenoizumi/>

teabreak 編

# 舞踏会

芥川龍之介

## ●前半部分

明治十九年十一月三日の夜であった。当時十七歳だった——家の令嬢——明子は、頭の禿げた父親といっしょに、今夜の舞踏会が催さるべき鹿鳴館の階段を上って行った。明い瓦この光に照らされた、幅の広い階段の両側には、殆人工に近い大輪の菊の花が、三重の籬を造っていた。菊は一番奥のがうす紅、中程のが濃い黄色、一番前のがまっ白な花びらを流蘇のごとく乱しているのであった。そうしてその菊の籬の尽きるあたり、階段の上の舞踏室からは、もう陽気な管弦楽の音が、抑え難い幸福の吐息のように、休みなく溢れて来るのであった。

明子は夙にフランス語と舞踏との教育を受けていた。が、正式の舞踏会に臨むのは、今夜がまだ生まれて始めてであった。だから彼女は馬車の中でも、折々話しかける父親に、上の空の返事ばかり与えていた。それ程彼女の胸の中には、愉快なる不安とでも形容すべき、一種の落着かない心もちが根を張っていたのであった。彼女は馬車が鹿鳴館の前に止るまで、何たいら立たい眼を挙げて、窓の外に流れて行く東京の町の乏しい灯火を、見つめた事だか知れなかった。

が、鹿鳴館の中へはいると、間もなく彼女はその不安を忘れるような事件に遭遇した。というのは階段のちょうど中程まで来かかった時、

二人は一足先に上って行く中国の大官に追いついた。すると大官は肥満した体を開いて、二人を先へ通らせながら、呆れたような視線を明子へ投げた。初々しい薔薇色の舞踏服、品好く頸へかけた水色のリボン、それから濃い髪に匂っているたった一輪の薔薇の花——実際その夜の明子の姿は、この長い辮髪を垂れた中国の大官の眼を驚かすべく、開化の日本の少女の美を遺憾なく具えていたのであった。と思うとまた階段を急ぎ足に下りて来た、若い燕尾服の日本人も、途中で二人にすれ違いながら、反射的にちよいと振り返って、やはり呆れたような一瞥を明子の後姿に浴せかけた。それからなぜか思いついたように、白い襟飾へ手をやって見て、また菊の中を忙しく玄関の方へ下りて行った。

二人が階段を上り切ると、二階の舞踏室の入口には、半白の頬鬚を蓄えた主人役の伯爵が、胸間に幾つかの勲章を帯びて、路易十五世式の装ひを凝らした年上の伯爵夫人といっしょに、大様に客を迎えていた。明子はこの伯爵でさへ、彼女の姿を見た時には、その老獪らしい顔の何処かに、一瞬間無邪気な驚嘆の色が去来したのを見のがさなかった。人のいい明子の父親は、嬉しそうな微笑を浮べながら、伯爵とその夫人とへ手短に娘を紹介した。彼女は羞恥と得意とを交る交る味だった。が、その暇にも権高な伯爵夫人の顔だちに、一点下品な気がするのを感じくだけの余裕があった。

舞踏室の中にも至る所に、菊の花が美しく咲き乱れていた。そうしてまた至る所に、相手を待っている婦人たちのレエスや花や象牙の扇が、爽かな香水の匂の中に、音のない波のごとく動いていた。明子はすぐに父親と分れて、その奇羅びやかな婦人たちのある一団といっしよになった。それは皆同じような水色や薔薇色の舞踏服を着た、同年輩らしい少女であった。彼等は彼女を迎えると、小鳥のようにさざめき立って、口口に今夜の彼女の姿が美しい事を褒め立てたりした。

が、彼女がその仲間へはいるや否や、見知らないフランスの海軍将校が、何処からか静に歩み寄った。そうして両腕を垂れたまま、丁寧に日本風の会釈をした。明子はかすかながら血の色が、頬に上って来るのを意識した。しかしその会釈が何を意味するかは、問うまでもなく明かだった。だから彼女は手にしていた扇を預って貰うべく、隣に立っている水色の舞踏服の令嬢をふり返った。と同時に意外にも、そのフランスの海軍将校は、ちらりと頬に微笑の影を浮かべながら、異様なアクサンを帯びた日本語で、はっきりと彼女にこういった。

「いっしよに踊っては下さいませんか。」

間もなく明子は、そのフランスの海軍将校と、美しく青きダニウブ」のヴァルスを踊っていた。相手の将校は、頬の日に焼けた、眼鼻立ちの鮮な、濃い口髭のある男であった。彼女はその相手の軍服の左

の肩に、長い手袋を嵌めた手を預くべく、余りに背が低かった。が、場馴れている海軍将校は、巧に彼女をあしらって、軽々と群集の中を舞い歩いた。そうして時々彼女の耳に、愛想のいいフランス語の御世辞さえも囁いた。

彼女はその優しい言葉に、恥しそうな微笑を酬いながら、時々彼等が踊っている舞踏室の周囲へ眼を投げた。皇室の御紋章を染め抜いた紫―縮緬の幔幕や、爪を張った蒼竜が身をうねらせている中国の国旗の下には、花ビン々々の菊の花が、あるいは軽快な銀色を、あるいは陰鬱な金色を、人波の間にちらつかせていた。しかもその人波は、三鞭酒のように湧き立って来る、花々しいドイツ管弦楽の旋律の風に扇られて、しばらくも目まぐるしい動揺を止めなかった。明子はやはり踊っている友達の一人と眼を合はすと、互に愉快そうな頷きを忙しい中に送り合った。が、その瞬間には、もう違った踊り手が、まるで大きな蛾が狂うやうに、何処からかそこへ現れていた。